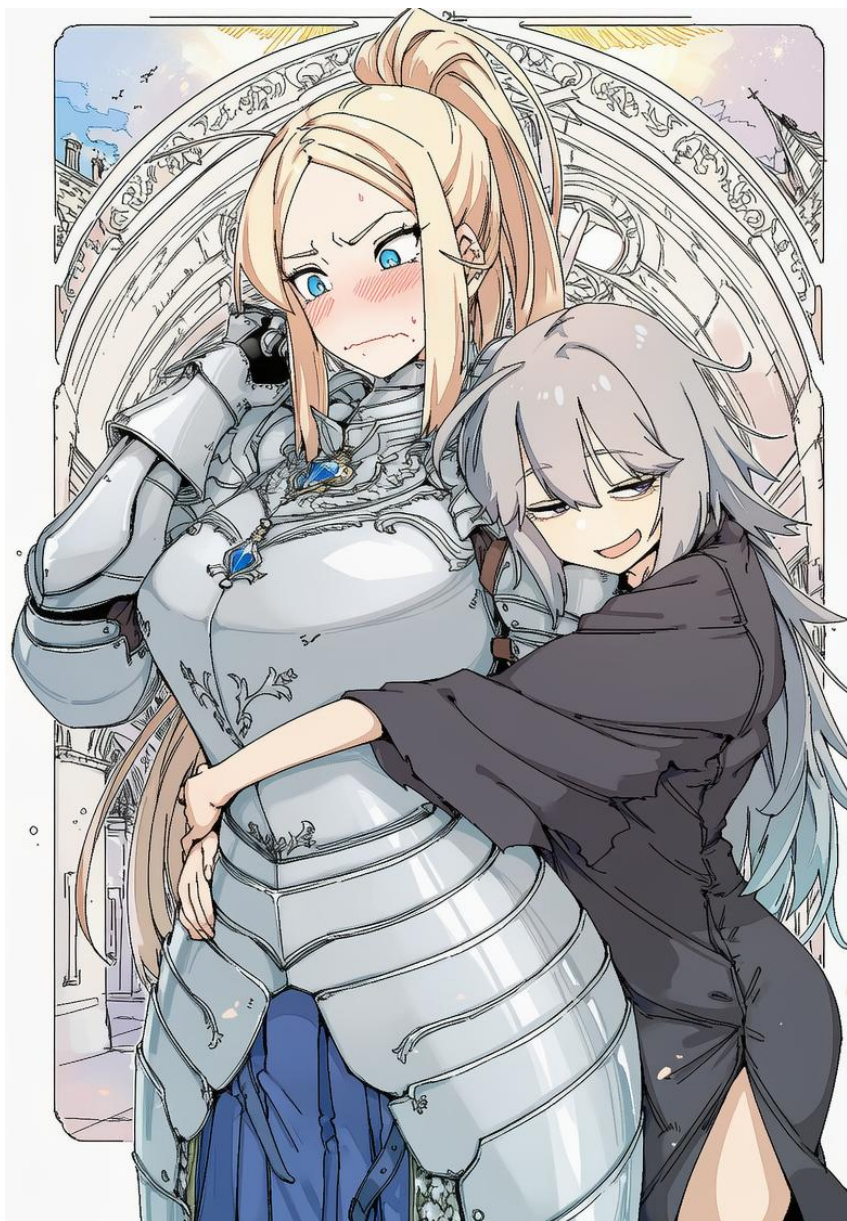


**気高き聖騎士エリスは
女魔導士ゼラの絶頂地獄でも
メス堕ちを拒む**



寸止め&連続絶頂 R18 / ベル

目次

第一章	王都への護送
第二章	王都礼拝堂での恥辱
第三章	ゴブリンと死闘
第四章	栄冠と解放
番外編	聖騎士の逆襲

第一章 王都への護送

木材の香りが雨によって空気と混ざり合い、馬車の密室を濃密に支配していた。

規則的に刻まれる車輪の音。

その振動が伝わるたび、エリス・フォン・ヴァロワが纏う銀の甲冑が、微かな金属音を奏でていく。鎧の内側で汗ばんだ肌が絹の下着に張り付き、不快な窮屈さを強いるが、彼女はその重みを自律心で押さえつけ、正面の囚人に冷徹な視線を据えていた。

「……ゼラ・ヴェネディクト。態度を慎みなさい。あなたは今、王都への護送中なのですよ」

「……あー、はいはい。慎んでるよ、これでもね。ふああ……」

正面に座る女魔導士ゼラは、はだけた黒いローブから覗く白い鎖骨を隠そうともせず、大きな欠伸を漏らしていた。灰色の無造作な髪がだらしなく揺れている。

彼女の両手には魔力を封じる枷がはめられていた。しかし、その周囲の空気だけは、まるで酸素が薄くなったような気配が漂っている。

奇妙な重圧。電気が蓄電しているような、どこかぴりつとした感覚。エリスは自身の肌が、かつてないほど敏感にこの魔導士の気配を捉えていた。

射抜くような瞳が、ゼラの眠たげな半眼とぶつかる。

温度差のある視線が交差するたび、閉ざされた車内の魔力密度は呼吸を妨げるほどに増していった。

「そんなに見つめられると照れちゃうよ。聖騎士様」

ゼラは唇の端を妖艶に吊り上げ、わずかに身を乗り出した。狭い馬車の中、彼女から漂う甘い香りが、エリスの鼻腔を執拗に愛撫する。

「ふざけないで。これ以上その口を開くなら、さるぐつわが必要かしら」

「ふふっ……真面目だねえ。そんなに肩を怒らせて」

この女、わざとやっている。そう理解し、エリスは膝の上で拳を握りしめた。

「……何がそんなに可笑しいのです。あなたが聖域でしかした汚辱……思い出すだけでも吐き気がする」

エリスの言葉に、ゼラは細い指先で枷を弄びながらくすりと喉を鳴らした。

「汚辱？ 心外だなあ。私はただ、あの清廉な修道院の皆さんに、『本当の祈り』を教えてあげただけだよ。君も見ただろう？ 祭壇の上で、聖職者たちが衣を蜜で汚しながら、神の名前の代わりに獣のような喘ぎを漏らしていた、あの美しい光景を」

「……黙りなさい」

「祈りの言葉がいつの間にか、もつと中を掻き回してほしいという嘆願に変わる……あの場所を支配していたのは、神への畏怖じゃない。自分たちの内側に飼っていた、おぞましいほど剥き出しの欲求だ。私は少し、それを肯定してあげただけ」

エリスの脳裏に、あの光景が嫌悪感と共によみがえる。

修道院の重い扉を蹴破った先にあつたのは、神聖な静寂ではなかった。濃厚に漂う女たちの体臭と、あられもない姿で絡み合うシスターたちの群れだった。

祈りを捧げるべき場のあちこちで、彼女たちは貪るように口付けを交わし、互いの秘所へ執拗に指を沈めては、狂ったように掻き回していた。神に捧げるはずの純潔が、互いの指先で蹂躪され、淫らな熱に溶けていく。理性を失った絶頂の叫びは、今もエリスの鼓膜の裏にこびりついていた。

「ふふ、そんなに怖い顔をしないでよ。あそこの祭壇、案外座り心地が良かったんだ。君が来るのを待っている間、ずっと眺めていたよ。信心深い修道女たちが、私の魔力で蕩けて、あられもない姿で祈りを捧げる光景をね」

ゼラは、あの日の光景を反芻するかのようにな下卑た笑みを浮かべる。エリスの脳裏に、最悪の初対面が鮮明に蘇った。

神聖なるべき修道院の最奥。祭壇に不遜に腰を下ろし、淫らな熱気に包ま

れた広間を、にやにやと愉悦に浸りながら眺めていた女。

「……剣を抜いて私を睨んだ時のエリス、本当にかっこよかったよ。その瞳に、私が映った瞬間にね。だから、抵抗せずに投降しただろう？」

不意に、ゼラが当時の口上をなぞるように囁いた。あの日、拔身の剣を突きつけたエリスに対し、ゼラは事も無げに両手を上げ、祭壇からしなやかに降り立ったのだ。

エリスは苦虫を噛み潰したような顔で、窓の外へ視線を逸らす。鎧のガンレットを、ぎりつと握り込んだ。

「……貴女のような存在を野放しにするわけにはいかない。王都の地下深くで、その歪んだ魔力ごと朽ち果てるがいいわ」

その時、馬車が大きく揺れた。

バランスを崩しかけたエリスの膝に、ゼラの視線が絡みつく。ゼラは半眼のまま、誰にも聞こえないほどの低い、けれど確信に満ちた声で囁いた。

「……ねえ、エリス。私がなぜ、あの修道院をこのタイミングで選んだか……本当の理由、教えてあげようか？」

「何……？」

「あんなの、ただの『撒き餌』だよ」

ゼラは、はだけた唇に艶やかな笑みを浮かべ、エリスの瞳を真っ直ぐに射抜いた。

「……私が本当に欲しかったのは、神様でも修道女でもない……その鋼の鎧で頑ななまでに自分を縛り付けている、高潔な『白銀の獅子』……君なんだよ、エリス」

その瞬間、馬車の中の空気が凍りついたように静まり返った。

心臓の鼓動が、鎧の内側でうるさいほどに跳ねる。エリスは射抜かれたような衝撃に、一瞬だけ呼吸を忘れた。

「……馬鹿げたことを。私が貴女のような魔女の毒に、屈するとも思っているのですか」

「毒だなんて、人聞きが悪いな。私はただの調律師だよ。君がずっと見ないふりをしてきた、その鎧の下にある疼きを、正しく引き出してあげようって言っているんだ」

ゼラは身を乗り出すこともなく、ただ目を細めてエリスを眺める。

魔力を封じられたはずの枷が、かすかに金属音を立てた。その音が、エリスには何かの重厚な門がゆっくりと開く音のように聞こえてならない。

「……貴女と話すことは、もう何もありません。王都に着くまで、その薄汚れた口を閉じていなさい」

「いいよ、私はね……でも、身体は正直だね、エリス。さっきから、車輪の振動に混じって、君の鎧が小刻みに鳴っている……それは武者震い？ それとも、私に本当の理由を告げられて、奥の方が期待で震えちゃっているのか

な？」

「きさま……ッ!!」

エリスは耐えかねて立ち上がろうとしたが、馬車が大きく跳ね、その勢いで向かいの座席に押し戻される。

「……怖いのかい、エリス。それとも、もう始まっているのかもしれないね……？ 君を墮とすための、私の仕掛けが」

「……っ……、黙りなさいと言って……いる……っ」

エリスは強く唇を噛んだ。視界の端で、ゼラが艶やかに、そしてどこまでも冷酷に微笑むのが見えた。

「……ふふっ、冗談だよ、エリス。そんな仕掛けなんて、何もしてないよ」
楽しげに喉を鳴らすゼラを、エリスは鋭い怒りの眼差しで射抜いていた。
ふざけている。この女。

「やだなあ。そんなに睨まないでよ。せっかく二人きりなんだから、もう少しリラックスすればいいのに。騎士様っていうのは、鎧を脱ぐのが下手だよ。物理的にも、精神的にも」

「……あなたと無駄口を叩くつもりはありません。静粛に」

エリスは目を冷たく細め、愛剣の柄を握り直す。

しかし、ゼラは皮肉げな笑みを浮かべたまま、エリスの全身を観察するように視線を這わせていた。

「……っ」

エリスは不意に、微かな熱を感じた。太ももの内側。絶対に、誰の指も届かないはずの鎧の隙間。そこを、形のない何かが、粘りつくような熱を持ってゆつくりと這い上がってくるのを。

「……ゼラ、あなた……何を……！」

「ん？ 何が？」

ゼラは膝の上で枷のついた手を組んだまま、小首を傾げた。その表情はどこまでも無垢で、退屈そうに見える。

だが、エリスの肌をなぞる感覚は、より鮮明に、より執拗に深部へと向かっていった。

（魔力……？ 枷を無視して、魔法を……!?）

エリスは奥歯を噛み締め、膝を閉じてその進行を遮ろうとする。だが、見えない愛撫は彼女の抵抗をあざ笑うかのように、さらに熱を帯びて神経を逆撫でしていった。

呼吸がわずかに、熱く乱れる。

そんなエリスの自壊を見透かしたように、ゼラがぼつりと、掠れた声で囁いた。

「……仕掛けなんて、いらないんだよ。こんな枷もね。だって、いつでもすぐ、始められるんだから」

その言葉が耳に届いた瞬間、エリスの背筋にゾクリとした悪寒が走った。この閉ざされた空間そのものが、既に自分の理性を侵食する毒だったことに気づいてしまったから。

「なっ……!?」

それは指先よりも繊細で、舌先よりも執念深いものだった。

鎧の隙間から滑り込んだ魔力の糸は、逃げ場のない鉄の檻の中で獲物を検分するかのように全身へと行き渡っていく。太ももの内側から背中、鼠径部の熱をなぞり、脇腹から胸へと。粘りつくような魔力の感触が、肌という肌を同時に、執拗に愛撫し始めた。

「……っ、ふ、あ……ッ！　あなた……やめ、なさい……ッ」

「やめる？　まだ始めたばかりだよ、エリス。私の魔力が、隅々まで届いたかな……？　これはね、君の身体を優しく、やらしく愛撫するんだ。変な薬なんて使わないよ……素の状態で、素の刺激をたっぷり受けて、淫らに喘いでほしいんだ」

ゼラが気怠げに目を細める。その捉えどころのない、けれど粘りつくような視線が、エリスの胸元へと注がれた。

「……あ、は……っ、何を……、ひ、うッ！」

薄いシルクの下着を透過した細い魔力の糸が幾重にも束となり、胸をすつぽりと包み込まれる。そして見えない指先によって強引に形を変えられてい

た。

（な、に……これ……っ。鎧の中で……揉まれて、いるの……ッ!?）

「……つく！ あ……、はあッ！ ん、あ……っ！」

「ふふ、鎧が重いから、中でどんなに揉みしだかれてるか外からは分からないね。でも、こんなに柔らかくて重たいものが、私の魔力で変形させられて……可哀想に、押し潰されて悲鳴を上げてるよ？」

「だま……りなさい……ッ！ く……っ、ああッ！」

必死に溢れる喘ぎを噛み殺そうと奥歯を鳴らす、ゼラは愉悦に満ちた笑みを深めるだけだった。

「……いいね、エリス。鎧の下に、こんなに大きなおっぱいを隠しているなんて。羨ましいよ。私にはないものだ。同じ女なのにね」

「……あ、は……っ、何を……、ひ、うッ！」

ゼラが虚空で指をすぼめる。刹那、魔力の糸がぎゅうっと絞り上げるように、エリスの豊かな胸を揉みしだいた。冷たい甲冑の内側で、柔らかい肉が強引に形を変えられ、逃げ場を失って密着する。

「この、先端の堅いところも刺激しようかな」

「……あッ、や、だ……そこ、は……あ、あッ!!」

悲鳴に近い甘い声が、馬車内の湿った空気に溶ける。糸が熱を持って隆起した乳首に幾重にも巻き付き、容赦なく絞り上げ、弾く。全身を這い回る無

数の糸が、エリスの感度を強制的に引き上げ、彼女の誇りを快感の泥へと引きずり込んでいく。

「ひうッ!? や、だ……!! つぶ、れる……っ、あああッ!」

「……ほら、声が出てきた。もつと聞かせてよ、騎士様。鎧の中、もう汗と蜜でぐちゃぐちゃなんじゃない?」

ゼラの無気力な囁きが、エリスの耳元で毒のように回る。

エリスは身をよじって抗おうとするが、鎧という檻は彼女の指先を遮り、内側で蠢く魔力を拭い去ることさえ許さない。ただ、執拗な見えない愛撫に翻弄され、熱い吐息を漏らすことしかできなかった。

「ひ、う……、あ、ああッ……!!」

エリスは溢れそうになる嬌声を必死に喉の奥で押し殺し、代わりに熱い、断片的な吐息を漏らす。手が座席の縁を軋むほどに強く握り締めた。だが、その強張った身体さえも、ゼラにとっては格好の玩具でしかなかった。

「……ふふ、そんなに力を入れたら、もつと敏感になっちゃうよ? ほら、鎧がカチカチ鳴ってる……新兵たちが見たら、憧れの隊長様が囚人に怯えて震えてるって勘違いしちゃうかもね」

「あなた……、ふ、あッ……いい加減に……しなさい……っ!」

「いい加減にするのは君の方だよ、エリス。そんなに顔を真っ赤にして、涙目で見つめてこられたら……もつと虐めてあげたくなる……ねえ、今どんな

感じ？　その、鎧に押し潰されてる胸の先……魔力がじりじりと、深く、熱く、突き刺さっているんじゃない？」

ゼラは面白そうに目を細めてエリスの崩壊を観察する。彼女が指を一節動かすたびに、エリスの鎧の内側で蠢く糸はより鋭く、より狡猾に、エリスが必死に守り通そうとする聖域の境界線を侵食していった。

「あ、はあ……っ、は、あッ……！　やめ……て……、もう……ッ」

「やめて、なんて言っても……身体はもつと欲しがってるよ。……ほら、首筋まで汗びっしょりだ。……君のその、気高い『白銀の獅子』っていう毛並みが、私の魔力で汚されていく……ねえ、最高に気分がいいよ」

エリスは奥歯を噛み締め、鼻から抜ける喘ぎを必死に耐えようとするが、ゼラの悪意が彼女の意識を真っ白に塗り潰そうとしていた。

「……っ……、私は……聖騎士、だわ……っ。あなたの……、あ、あああッ！……こんな、不浄な……魔法に……っ」

「……まだそんなこと言えるんだ。……じゃあ、もう少し加速させてあげようか……君のその誇りが、ぐちゃぐちゃに溶けて、ただの女の声に変わるまで」

ゼラが薄い唇に艶やかな笑みを浮かべた。次の瞬間、エリスの全身を這い回っていた糸が一斉に脈打ち、彼女の理性の最後の一線を無慈悲に、そして甘美に蹂躪し始めた。

「ほら、外の部下たちに助けを求めてみたら？ 『馬車の中で囚人に弄ばれてる』ってさ」

「な……っ！ あなた、何を……っ」

窓の外では、雨の中、剣を帯刀した部下たちが真剣な面持ちで馬を並走させている。その規則的な蹄の音さえ、今のエリスには自身の心臓を急かす不吉なカウントダウンに聞こえた。

「彼らはきつこう思っているよ。『隊長は今日も厳しいな。あの背筋、少しは見習わないと』ってね。……ふふ、あんなに真っ直ぐな視線を向けられて、どんな気分？」

「や、やめっ……はあっ、ふ、う……ッ」

『『それにしてもあの魔導士、おとなしすぎて拍子抜けだ。まあ隊長が一緒ならしょうがないか』……なんてね。まさか自分たちが尊敬してやまない『白銀の獅子』が、今この瞬間、鎧の内側で得体の知れない指先に、秘められた柔らかな肉を愛撫されているなんて夢にも思わないだろうさ』

ゼラは、はめられた枷をカチリと鳴らし、退屈そうに首を傾げた。だが、その瞳の奥には、獲物の喉元を愉しげに眺める捕食者の熱が宿っている。

「だめだよ？ 君は白銀の獅子なんだ。隊長なんだ……メスとして喘いでいるわけにはいかないんだよ？」

「……っ……、私は、そんな……不実な、声は……っ」

けらけらと、ゼラは壊れた鈴のような音を立てて笑う。その視線は、エリスの重厚な胸当ての下で、呼吸のたびに激しく上下する膨らみを冷酷に観察していた。

「……いいよ、その強がり。でも、身体は正直だね……ねえ、エリス。さっきから、車輪の振動に混じって、君の鎧が小刻みに鳴っているよ。それは武者震い？ それとも……その鉄の檻の中で、私の魔力に『期待』して震えちゃってるのかな？」

「ゼラ……ッ!!」

「そんなに睨まないでよ……ほら、また奥まで触れたよ？ ……そんなに顔を真っ赤にして、部下たちの前で誇り高い剥製のままでいられるかな。それとも、ここで全部台無しにしてあげようか？」

エリスは奥歯を噛み締め、鼻から抜ける喘ぎを必死に耐えた。だが、ゼラが送る見えない愛撫を何倍にも増幅し、彼女の誇りを快感へと引きずり込んでいく。

「……ひ、う……あ、は……っ！」

「汗で下着が張り付いているね……おや、汗だけかな？ ほら、こんなに水音をさせているよ」

ゼラが虚空で指を小さく弾くと、エリスの下半身に潜り込んでいた糸が束となり、溢れ出した蜜を執拗にかき回し始めた。

——ぐちゅ、じゅぷり。

鉄の檻のような馬車の中に、あまりに淫らで、あまりに生々しい「水音」が響き渡る。外で馬を走らせる部下たちには聞こえない。けれどエリスの耳には雷鳴よりも大きく響く、屈辱の音。

「や、め……っ、その、音……は……あ、あぁッ!!」

「聞こえてるよ、エリス。君の中から、こんなに汚い音が出てる……君の誇りが、その音一つで削られていくのが分かるよ」

「……っ、ふ、う……あ……ッ」

エリスは自らの唇を噛み締め、必死に騎士としての体面を繋ぎ止めていた。だが、鎧の下で蠢く見えない魔力は、彼女の強固な自制心を嘲笑うかのよう。に最も過敏な一点を執拗に、かつ巧妙に弾き続ける。

「ねえ、エリス。どうしてそんなに肩を震わせてるの？ 私はただ、護送されるだけの無力な囚人だよ？」

「黙………ない………っ。あなたが、何をして………あ、あ………っ」
「何もしてないよ。見てよ、私の手。枷に繋がれたままでしょ？」

ゼラは、皮肉なほど静かに笑いながら、枷のついた両手を持ち上げて見せた。だが、その視線はエリスの膝の間に固定されている。鎧の隙間、内腿の

柔らかい肉が、不可視の愛撫に抗うように小刻みに震えているのを彼女は楽しげに観察していた。

「……あ、ああ……ッ！」

不意に、刺激の質が変わった。魔力がまるで質量を持った指のようにエリスの秘所を深く抉り、搔き回す。

「ひ……う、あ……っ、やめ……そこ、は……ッ！」

「そこって、どこ？ 言ってくれないと分からないよ。……ああ、もしかして、この辺かな。魔力が集中して、すごく……熱くなってる」

ゼラが虚空で指先を軽く動かす。それと完全に同期して、エリスの身体の中で何かが凶悪なまでに跳ねた。騎士として鍛え上げた腹筋が、快感のあまり無様に波打つ。

「あ、はあ……っ、あ……！ ゼラ……きさま……っ、殺して……」

「殺す？ ご冗談を。そんなに可愛い声で鳴いている君に私が殺されるはずないじゃないか……私が君をイキ狂わせることなら、出来るけどね」

ゼラの半眼が、愉悅に細められた。

エリスの鎧の下。先ほどまで繊細に肌を撫で回していた魔力の糸が集束し、脈打つように密度を増していく。

「……っ！？ な、に……。なにか、が……ッ」

「なにつて……ただの指の愛撫じゃ、キミのその立派なプライドは壊せない

と思つてさ。少し、形を整えてみたんだよ……どう？ さつきよりずっと、『存在感』があるだろう？」

鎧の内側。秘所に這い寄っていた糸が太く硬く、膨れ上がっていく。それは荒々しい節を帯び、凶悪なまでの反りを備えた男性の肉棒そのものの質感へと変貌していた。

にゆるり、と湿った熱量を帯びた亀頭の形状が、エリスの入口を執拗にこすり上げる。

「あ……っ、や、だ……！ なに、これ……大きすぎ……っ、入るわけ、ない……ッ！」

粘りつくような節の感触と、秘部を押し潰す圧倒的な肉塊の存在感。触れられているだけで、これからどれほどの暴力的な蹂躪が内部を襲うのかを理解させられ、エリスの顔から一気に血の気が引いた。あまりの凶悪さに、背筋を絶望的な寒気が駆け抜ける。

「ふふ、青い顔をしてどうしたの？ まだ先っぽで撫でてあげているだけだよ……ほら、ここを『にゆるっ』と押し当てられるだけで、恐ろしさに震えて蜜を溢れさせてる……可愛いねえ」

「ひ、ああッ……！ ぜ、ゼラ……っ、やめ……こんな、不浄なものを……っ！ 私は……聖騎士だぞ……ッ、こんなもので、屈する、わけが……ッ！」
必死に叫び、弱気な震えを隠そうと強がり口を口にしかけた、その時だった。

「ほら、馬車が揺れるよ。気をつけないと、舌を噛んじゃう」

——ガタンッ！

無慈悲な言葉と同時に、馬車が激しく跳ねた。

その衝撃を合図にするかのように、入り口を焦らしていた凶悪な質量が、一気の加速をもつてエリスの最奥へと容赦なく突き刺さった。

「ぐ、あッ……!? ——っ、は……っ!?」

生々しい肉音を立てて貫かれ、エリスの叫びは声にすらならず途切れた。絶望的な太さと硬さが内壁を強引に削り広げ、最深部を容赦なく打ち据える。

「あ……っ！ ぱ……っ、あ、あああああああああッ!!」

目は大きく見開かれ、エリスの口は酸欠の金魚のようにぱくぱくと虚空を貪る。

胃の腑まで突き抜けるような衝撃と暴力的な快感に、騎士としてのプライドも理性も一瞬で粉碎された。白目を剥きかけるほど激しく頭をのけぞらせ、ただただ無様な喘ぎと引きつった呼吸を漏らしながら、全身をガクガクと激しく痙攣させることしかできない。

「……あ。言わんこっちゃない。今の、外まで聞こえたんじゃないかな？」

ゼラの冷ややかな指摘。だが今のエリスには、それを否定する言葉さえ見つかからない。喉の奥は熱い喘鳴で塞がれ、口元からは制御できない雫がこぼれ落ちる。

「……は、はあ……っ、は……。……あ……っ」

一回目の、雷に打たれたような強引な絶頂。エリスは魂を抜き取られたように脱力し、鎧のきしむ音だけが静まり返った車内に空虚に響いた。

「……ふふ。白銀の獅子が、ただの震える仔猫になっちゃったね……。でも、残念。私の魔力はね、一度馴染んだら、キミが壊れるまで離してくれないんだ」

「……、……っ……？」

「幸い、雨音が味方してくれている。外に声は聞こえない……。ねえ、エリス。誰にも気づかれないうまま、この檻の中で、私の形に作り替えられていく気分はどうだい？」

ゼラが虚空で指を弾く。刹那、エリスの身体を内側から支配していたものが、再び脈打ち始めた。

「おや……王都まではもう少しでつきそうだね、エリス」

「……あ、や……もう……っ」

絶頂の余韻で指先一つ動かせないエリスの耳元に、死神の囁きのような冷ややかな声が届く。鎧の内側では、先ほど彼女を蹂躪した魔力が、いまだに

熱烈な脈動を繰り返していた。

「……っ、ふ……あ……あなた、いい加減に……」

「じゃあ、ゲームをしようか。王都に着くまでにエリスがもう一回イったら、終わりにしてあげる。でも、イクまではずっと……責め続けてあげるよ」

ゼラは、はだけた唇の端を吊り上げ、にやあつと邪悪に笑った。その瞳は、逃げ場を失った獲物を観察する強者のそれだ。

「わかるかい？ 王都に着くと馬車が止まる。そうすると、部下が扉を開けるよね……そして見るんだ。君が乱れてどろどろになった、無様なメスの姿を」

「な……っ！」

エリスの顔から一気に血の気が引いた。

想像してしまったのだ。扉が開いた瞬間の、部下たちの呆然とした顔を。そして、その視線に晒される、鎧の下で蜜に溺れ、よだれを垂らしている自分自身の姿を。

「私は当然、君がイってなければ止めないよ？ ……どうなるかな。よがり

狂う『白銀の獅子』様を、最愛の隊員たちに晒すことになる。彼らは喜ぶかな？ 悲しむかな？ それとも……興奮しちゃうかなあ」

「……、……っ……やめて……」

「言えることは一つ。君がもう隊長ではなくなることは確かだよねえ……さ

あ、始めようか。抗うよりも、さつさと無様にいつちやった方が、君のためだよ？」

ゼラが、枷をはめられた指先をくいつと上に跳ね上げた。

刹那、エリスの最深部に居座っていた魔力の塊が、先ほどよりも一層激しく、荒々しく蠢き始める。

「あ、あああッ!? ……ひ、う……あ、ああああッ!!」

ごつごつとした、あまりに生々しい感触。それが、騎士としての矜持を土足で踏み荒らすように執拗に突き上げ、広げていく。

馬車の揺れが、その無慈悲な振動をさらに増幅させた。

「……あ、は……っ、は、あ……ッ! だめ……っ、今……は……っ」

「ほら、王都の門が見えてきたよ? 急がないと……それとも、あんなに信じていた彼らの前で、私の形に作り変えられるところを実況してほしいのかい?」

ゼラの笑い声が、馬車の中に反響する。

エリスは唇が切れるほど強く噛み締め、絶頂を押し戻そうとするが、肉体は残酷なまでにゼラの悪意を吸い込み、限界以上の快楽に震え続けていた。

「……あ……あ……ああああッ!!」

誇り高き瞳が、涙で潤み、視点を失う。
門をくぐる馬車の音と、鎧の下で鳴り響く「じゅぷじゅぷ」という淫らな

水音。

二つの音が重なり合う中、エリスは聖騎士としての死と、女としての崩壊の、どちらを選ぶかという残酷な天秤にかけられていた。

「……ひ、あ……ッ！ あ、あああッ！」

「ほら、もうすぐ馬車が止まりそうだよ？ イクときはイクって、ちゃんと報告してね？ じゃないと私、魔力止められないからさ」

ゼラの声はどこまでも平坦で、それゆえに冷酷だった。

「あ、はあ……っ、は、あ……ッ！ や、め……っ」

やがて、馬車の速度が目に見えて落ちてきた。

石畳を叩く蹄の音がゆっくりと、間遠になっていく。それはエリスにとって、処刑台への階段を上る音に他ならなかった。

「……あ、あ……っ」

限界だった。

脳を焼き切るような快楽と、社会的な死への恐怖。

その境界線が溶け落ち、エリスはついに呂律の回らない声で叫んでいた。

「イク……イクからりやあ……ッ！！」

エリスは大きく身体を逸らし、天を仰いだ。

「あ、はあああッ！ あッ、あ……ッ、あ……！！」

白銀の甲冑が激しく震え、身体を強烈な痙攣が突き抜ける。無意識のうち

に足がガクガクと震え、鎧の膝当てが虚しくカチカチと乾いた音を立てた。あまりに無慈悲な奔流に、誇り高き騎士の清潔は無残に崩壊した。鎧の隙間からは、熱を持った汗と、言い逃れようのない粘り気を帯びた蜜が滴り落ち、馬車の床に黒い染みを作った。

「かわいいね。いいイキっぷりだったよ、白銀の獅子様」

ゼラが満足げに指を下ろした瞬間、ぴたりと、内側の蹂躪が止まる。

だが、絶頂後の激しい残響に浸る暇など、この残酷な魔導士は与えてくれない。

「隊長。王都に到着いたしました」

外から部下の真っ直ぐな声が響く。

エリスは大きく肩で息をしながら、溢れたよだれを拭う余裕もなく、震える手で自身の膝を必死に抑え込んだ。内側が熱く、重く、ぐっしりと濡れて歩くことさえままならない。

「ほら、呼んでるよ？ 応えてあげなきゃ」

「……っ……。……わかった。すぐに降りる。準備を……させなさい……っ」「はっ！」

外の気配が遠ざかり、扉が開くまでのわずかな猶予。

エリスは虚ろな瞳で、ソファに深々と座ったままのゼラを睨みつけた。だが、その視線は鋭さを失い、熱に浮かされたように潤んでいる。

「きさま……よくも……っ」

「ふふっ。睨んでいるつもりかい？ 私には、もっと奥まで欲しがっている

哀願にしか見えないけどね」

ゼラはそう言って、最高に皮肉な笑みを浮かべた。その視線は、まだ熱を帯びて小刻みに震え続けているエリスの足を、ねつとりと舐めるように捉えている。

ガチャリ、と馬車の扉が開いた。

城内につけられたランプの灯りがエリスの白銀の鎧を照らし出す。内側で肌を滑る蜜の感触を必死に無視し、鉄の意志で膝の震えをねじ伏せた。

「隊長、お疲れ様です！」

敬礼する部下たちの前に、エリスはゆっくりと降り立つ。

鎧が擦れる音は、彼女の耳にはあまりに淫らな残響に聞こえた。一步踏み出すたびに、秘所に溜まった熱が重力に従って溢れ出しそうになる。それを悟られまいと、彼女はいつも以上に険しい表情を作り、騎士としての仮面を貼り付けた。

「……ああ……護送は……私が、直接、行う……」

声がわずかに掠れたことに、部下たちは気づいたのだろうか。

背後で馬車から降りてくるゼラの、クスクスという忍び笑いがエリスの背中に突き刺さる。

白銀の獅子としての誇りは、今、一歩歩くごとにその足元から目に見えない蜜の跡となって剥がれ落ちていた。

第二章 王都礼拝堂での恥辱

夜明け前の礼拝堂は、研ぎ澄まされた静寂に満ちていた。

高い天井から降りる冷氣と、ステンドグラスを透過する淡い月光。かつての聖者たちが守り抜いてきたこの場所は、俗世の汚れを一切拒絶するような神聖さを保っている。

聖騎士団の象徴である白銀の鎧を脱ぎ捨て、薄手の白い礼拝服一枚となったエリス・フォン・ヴァロワは、冷たい石床に跪いていた。

「……主よ、お許しください。私の内に宿った、この浅ましい熱を」
組んだ指先に白くなるほど力を込め、エリスは目を閉じる。

自分にとって神とは、絶対的な救済というよりは、自分を規律の枠に繋ぎ止めてくれる冷徹な楔に近かった。この祈りの儀式こそが、自分を立て直す唯一の手立てなのだ。

（……いけない。今は、祈りに集中を……っ）

懺悔を捧げているそばから、馬車で徹底的に開拓された身体が勝手に記憶を再生し始める。

冷え切った礼拝堂の空気の中で、薄い布地を隔てた胸の先端が思い出したかのように熱く隆起する。石床の冷たさに反して下半身がじわりと、言いようのない重みを帯びて震え出した。

「……………あの、不浄な魔力……………。あれは、ただの……………不可抗力であり……………」

自分に言い聞かせる言葉とは裏腹に、脳裏にはあの魔導士の退屈そうな、けれど獲物の急所を正確に射抜くような瞳が浮かぶ。

鎧という檻の中で自分を突き上げ、無理やり形を押し広げたあのごつごつとした感触が、今この神聖な沈黙の中であまりに鮮烈な残響となって蘇る。

（考えては、いけない。あれは毒だわ。私の誇りを、溶かすための……………つ）

自省し、より深く頭を垂れる。

しかし意識すればするほど、内側でくすぶる熱は、まるでゼラの指先がまだそこに残っているかのように執拗に脈打った。

かつては安らぎであったはずの礼拝堂の静寂が、今は自分の内側から漏れ

出す熱い吐息を際立たせるだけの残酷な装置に変わっていく。

「……あ、は……っ。……主よ、私は……っ」

清廉な石床に一滴、額から汗が落ちる。神の御前で、なおも囚人の女に作り替えられた感覚を求めてしまう、身体の裏切りに対する屈辱の熱だった。聖騎士としての誇りと、女として刻まれた背徳の記憶。二つの狭間で揺れるエリスの祈りは、いつしか神への嘆願から、自分自身の内側に広がる欲に呑み込まれないための抵抗へと変質していった。

「……随分と熱心なこと。神様に何を告げ口してるの？」

「っ……!? その声……」

エリスは弾かれたように振り返った。

脳裏を掠めたのは、数時間前の光景。

王都の地下深くにある、鉄格子と魔力封じの術式が幾重にも施された牢獄へ、ゼラを突き出した瞬間の記憶だ。

——ここで朽ち果てるがいいわ、魔女。

そう吐き捨て、睨みつけた自分に対し、ゼラは拘束されたまま「また遊ば

うね」と不吉なほど無邪気に笑っていた。その笑みが、今、この神聖な沈黙を切り裂いて記憶に蘇る。

「ゼラ……!? 馬鹿な……あなたは地下の牢獄に繋がれているはず……っ」

「身体はね。でも、エリス。魔導士の思念を縛るには、その粗末な牢獄はあまりに壁が薄すぎるってこと、まだ理解してなかった？」

今度は声が祭壇のすぐ脇から届く。視線をむけると、そこには陽炎のように揺らめき、月光を透過させるほどに希薄なゼラの姿があった。

実体ではない。魔力で編み上げられた彼女の思念体だ。

煙のように境界が曖昧で、それでいて存在感だけは冷酷なまでに鮮明。月明かりを浴びて青白く光る髪と、重力に従わぬ魔導士のローブがふわりと幻想的に舞う。

「……っ……、思念体でここまで……。貴公、どこまで……」

「んー？ 酷いなあ。寂しそうに震えながらお祈りしている君が心配で、わざわざ牢を抜け出してきたっていうのに」

ゼラは空中を歩くように、音もなくエリスへ歩み寄る。幽霊のように透き通った彼女の指先が、エリスの頬を掠めた気がした。実際には触れていないはずなのに、肌が冷氣と、あの忌々しい魔力の香りを感じ取ってしまう。

「……来ないで。ここは神聖な礼拝堂よ。貴女のような不浄な存在が、足を踏み入れていい場所ではないわ」

「神聖、ねえ……じゃあ、その神聖な場所で、さっきまで何を考えていたか当ててあげようか？　聖騎士様」

「………っ」

エリスはくつと奥歯を噛み締めた。

礼拝服の下。馬車で刻まれた残響が、ゼラの姿を見ただけで再び疼き始める。

揺らめくゼラの半眼が、エリスの乱れた吐息を愉しげに捉えていた。

「君の神様は、君の身体が今、こんなにも私の魔力を欲しがっていることを知っているのかな？」

「……黙りなさい。私は、決して……貴公に屈しはしない……っ」

掠れた声で突き放すエリスに、ゼラはまた、ゆっくりと、楽しげに笑った。

エリスは冷ややかな眼差しをゼラへ投げ、すぐさま視線を祭壇へと戻した。

再び冷たい石床に膝をつき、祈りの形を作る。指を組み、項垂れ、意識を神聖な静寂の奥底へと沈めようと試みる。

「ふふっ、本当に熱心だね。そんなにまでして、自分の罪を消し去りたいのかい？　それとも、信仰が深すぎて私が見えていないのかな？」

「……黙りなさい。不浄な貴女には、一生かかっても理解できないことよ」
エリスはゼラを完全に無視し、祈りの言葉を唇の中で紡ぎ続ける。

所詮、目の前の存在は実体のない「思念体」に過ぎない。ただうるさいだ

けの、月光が見せる不気味な幻想。そう自分に言い聞かせれば、心臓の鼓動も少しずつつ落ち着きを取り戻すはずだった。

「不浄かあ。冷たいなあ、エリス。私もこれでも年頃の女の子なんだけどな。そんなに毛嫌いされると、さすがに傷つくじゃないか」

芝居がかったゼラの言葉さえ、エリスは意識の端に追い遣る。

触れることも、干渉することもできない亡霊に乱される理由などどこにもない。

そう、思っていた。

「ひ……っ!？」

瞬間、冷たい石床に接していたエリスの足首に、あり得ないはずの熱が絡みついた。

それは、形を持たないはずの魔力の蛇。月光を透過させていたはずのゼラの意志が、確かな重量感を持ってエリスのふくらはぎを、膝の裏を、執拗になぞりながら這い上がってくる。

「な……ッ、なによ、これ……! あなた、実体はないはず……っ」

祈りの形は一瞬で崩れ、エリスは身をよじってその熱から逃れようとする。だが、見えない蛇は礼拝服の裾を割り、剥き出しの太ももへと容赦なく牙を立てた。

「思念体だから、何もできないと思ってた? ……可愛いね、エリス。魔導

士にとって身体なんて、単なる器に過ぎないんだよ。私の意志が、君のその敏感な肌を撫でたいと願えば、魔力はどんな感触にだって化ける」

ゼラの姿は相変わらず陽炎のように揺らめいているが、その瞳だけは残酷なまでに爛々と輝き、跪くエリスを見下ろしている。

「さあ、証明してみようよ……君が本当に、私の毒を跳ね返す『不浄じゃない聖騎士様』なのかどうかを、さ」

「や、め……っ、あ……ああッ！」

膝の裏を這い回る熱い舌のような感触。

エリスは石柱に縋り付き、必死に声を殺すが、薄い布一枚の無防備な身体は思念体となったゼラの悪意を、これ以上ないほど鮮烈に受け入れてしまう。

「……やめ、なさい……っ……主の御前、ですよ……っ」

「神様の前だからこそ、嘘はつけないよね……ほら、脚。そんなに強く閉じたら、中の魔力が逃げ場を失ってもっと酷いことになるよ？」

「あ……、ああ……ッ」

ゼラの魔力は容赦なく礼拝服の裾を潜り抜け、彼女の最も無防備で、最も熱を持った聖域へと、迷いなく指を伸ばした。

「……っ……、……あ……！」

静寂な礼拝堂に、切迫した熱い吐息が零れ落ちる。

ゼラはそれを見て、満足げに、そして不気味なほど優しく微笑んだ。

「エリス……君はまだ私を甘く見ているようだね……これから、君の信心が、どれだけ私の魔力に耐えられるか……じっくり試してあげるよ」

「……っ、ふ、う……あ……ッ」

エリスは唇を噛み締め、せめて声だけは漏らすまいと抗った。しかし、礼拝堂の静謐な空気は、彼女の意志を嘲笑うかのように、わずかな衣擦れの音さえも鋭く拾い上げる。

「ねえ、エリス。そんなに顔を真っ赤にして……神様に何を報告しているの？ 『不屈きな魔導士の魔法に、身体の奥をかき回されてます』って？」

「黙り……なさい……っ。……あ、は……ッ」

「口では拒絶しても、魔力を受け入れる速度はさっきよりずっと早くなってる……ほら、ここ……馬車で、何度も教え込んであげた場所だよ」

ゼラの思念体が、エリスの首筋に顔を寄せる。実体がないはずなのに、そこには確かな気配と、冷ややかな香りが立ち込めていた。

「だめじゃないか。下着なんてつけて。神様の前では生まれたままの姿を見せないと」

「えっ……、な、にを……ッ」

薄手の白い礼拝服の内側へ魔力が滑り込む。エリスが反応する間もなく、胸当てとショーツをとどめていた糸が、見えない刃に断ち切られるような微かな音を立てた。